「元初まりの話」に登場する動物たち（5）

「うを」について ⑤

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

心勇組の初代講元を務めた山田伊八郎は、明治14年頃より、大和国の十市郡倉橋村から山辺郡庄屋敷村の教祖のもとへ、事あるごとに通うようになった。そして、教祖から直に「元初まりの話」を聞かせてもらうようになった。

道友社編『先人の遺した教話（三）根のある花・山田伊八郎』（1982年）によると、伊八郎は、明治15年1月、教祖からお聞きした「元初まりの話」を、そのまま『天輪王命』と題する和綴の帳面に書き留めていた、と金子圭助氏は序文にあたる「本書を読まれる人のために」で述べている。ただ、「元初まりの話」については、同年8月か9月にまとめたとされる『聞問記』にも記述されている。この『聞問記』は、『天輪王命』よりもより整理された内容となっているが、両書とも、伊八郎が教祖から直に拝聴した「元初まりの話」を、きわめて正確に書き記した資料として、たいへん貴重なものとなっている。

そこで、『聞問記』の中の「古記」から、“ぎぎよ”に相当する「うを」の部分を抜き出し、本当にサンショウウオなのかの検証を、以下に一部を引用してその文脈から類推する。

これからハ、世界こしらい　にんげんをこしらいるにハ、道具ひながたみだすもよふ。其どろ海なかをよくみすませバ、うお（ママ）とみいとがまじりいて、このうをハ　にんげんのかおで　うろこなし。からだハ人間のはだやいで、それゆへに人ぎうとゆふ。また　ぎふげふともゆふ。このうをの　かたの処に　ゑらがあり、此うをハ、よこいもよらす　あといも　もどらすに、ただむこいへと　いくと斗り。

前号では、（1）「うを」の生息地と繁殖について紹介したが、以下では、『聞問記』の「古記」の中から「うを」の形態や行動を解析し、「うを」の同定を試みた。

（2）「うを」の形態

「古記」には、「うを」は「…にんげんのかおで　うろこなし。からだハ人間のはだやいで、人ぎうとゆふ」と記されている。魚のように鱗がなく、人間の顔に似ていることから人魚という、とある。前号では、“ぎぎよ”は「鯢魚」であり、“人ぎよ”は「人魚」を指し、両者はサンショウウオを意味すると考えた。サンショウウオは体の表面に鱗をもたず、人間の肌のようにつるつるで、顔は人間的な愛嬌を醸し出している（図1）。

図1．水中の小枝につかまるキタサンショウウオ。

また、「古記」には、この「うを」は「…かたの処に　ゑらがあり」とあるが、同じ山田伊八郎文書の『教祖様御言葉』（明治18年7月19日　神様の仰せ）にも、「魚のかたの処、ゑらが有」と同じような表現がみられる。

田畑の水溜まりにいて、しかも肩のところに鰓（えら）が明瞭に認められる動物は、有尾両生類（尾を有する両生類）の幼生であり、イモリやサンショウウオがそれに該当する。同じ両生類でもカエルのように鰓が体内に入っている場合は、ほとんど外側からは見ることができない。同様に、魚の鰓は外側からほとんど見ることはできない。

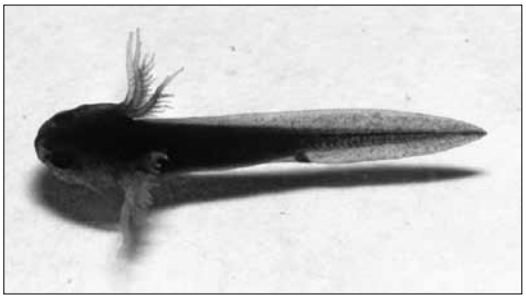

図2．孵化して間もないエゾサンショウウオの幼生。頭部の後ろには多くの鰓がある。

大和盆地の山麓には両種とも生息するが、「鯢魚」と呼ばれていたのはカスミサンショウウオのことである（前々号参照）。図2に示したように、サンショウウオの肩のところには鰓がある。すなわち、「ぢば」周辺では「かたの処に　ゑらがあ」るのは、カスミサンショウウオの幼生を意味している。

カスミサンショウウオは小型のサンショウウオで、ほぼ同じ大きさのドジョウとは田畑の水溜まりを共通の繁殖場所としている。繁殖時期は、カスミサンショウウオの後半とドジョウの前半部分で重なることがあり、そのことから、この時期は、ドジョウがたくさんいる中をよく見澄ますと、足が生えたドジョウ、すなわち「畑ドジョウ」とドジョウが混生する場面を実際に見ることができる。

形態学的にみても、『聞問記』の「古記」や『教祖様御言葉』の「神様の仰せ」で示される「うを」は、当時は間違いなくカスミサンショウウオを想定していたと考える。

（3）「うを」の行動

「古記」には、「うを」の行動として、「此のうをハ、　よこいもよらす　あといも　もどらすに、ただむこいへと　いくと斗り」という表現がある。

日本に棲む止水繁殖性の小型サンショウウオは、1年のほとんどを陸上で生活する。水中へ入るのはあくまでも繁殖のためであり、雄の場合は2週間前後、雌にいたってはほんの数日間である。その短い水中活動期間に、ドジョウとカスミサンショウウオは田畑の水溜まりで遭遇することになる。

この時のサンショウウオの泳ぎは、魚のように前後左右に自由に動き回ることはできず、前へ前へと進むような泳ぎ方である。むしろ、卵からふ化した幼生（図2）が水中で泳ぐ姿は、まさに「よこいもよらす　あといも　もどらすに、ただむこいむこいと　いくと斗り」の動きである。このような泳ぎで生活する幼生は、1カ月余すると変態して幼体となり、「水中の住まい」から「陸上の住まい」へと生活場所を変える。

行動学的にみても、「古記」や「神様の仰せ」における「うを」は、明らかにカスミサンショウウオを想定していたと考える。

以上により、教祖は、当時はふつうに見ることができたカスミサンショウウオを想定しながら、男雛型の「理」の話を、「うを」を通して私たちに教示されたのではないかと考える。